

「雪国」新潟の雪意識の変化

N H K新潟放送局 山崎智彦

2009 年秋。新潟県南魚沼市の山の中でカマキリの巣（卵）を見つけました。

高さ 2 m ほどのところ、木の枝にしっかりとくっついていました。

しばしば「カマキリの巣（卵）が高い所にある冬は大雪」という伝承を耳にします。

「今シーズンは小雪」というニュースが流れた後での発見に、

「心配性のカマキリか、それとも人知及ばずか」などと思っていましたが、軍配はカマキリに上がりました。

2009 - 2010 冬。例年はほとんど雪が積もらない新潟市でも記録的な降雪を観測しました。

2 月 3 日深夜から降り始めた雪は 2 月 4 日、5 日と収まる気配を見せず、最大積雪 81 cm を記録。

昭和 59 年の豪雪・いわゆる『ごー・きゅう豪雪』以来となり、都市機能が大きなダメージを受け、市民生活が混乱しました。

しばしば『新潟市は雪が多い所ですよ？』と聞かれますが、それほど積もりません。

ただ、新潟市内の 60 代の男性が「30 年前はこのくらいの雪はよく降ったけどなぁ」と話してくれたように、かつては新潟市も「雪国」だったようです。（2005 - 2006 年の大雪がありましたが高かったです）

今回の大雪を受けて、心配になったことがあります。

「市民から雪に対する危機意識がなくなり、雪対策も十分にしていないのではないか」ということです。

「これまで大丈夫だったから今回も大丈夫」「雪の危険なんて知らなかった」「なんとかなる」という感覚が

「雪国・新潟」にも広がっている事がわかったので、今後の防災の参考になればと書き出します。

事例

地吹雪による 100 台立ち往生

現場となったのは、新潟市郊外の、周りには建物がほとんどない田んぼが広がる平野をまっすぐに抜ける片側 1 車線の道路です。普段から地元の人が幹線道路のう回路として利用しています。

今回も、大雪による渋滞を回避しようとする人が車を走らせていましたが、1 台のトラックが立ち往生しました。

道路上の雪が深かったため、トラックを救出しなければ後続の車、対向車ともに通れない状況となり、ドライバーが集まってトラックの脱出作業を行いました。

ところが、稀に見る大雪（7 ~ 11 cm/h : 「平成 22 年 2 月 3 日から 2 月 6 日の大雪に関する新潟県気象速報（新潟地方気象台, 平成 22 年 2 月 9 日）」 p.10 「積雪差」）だったため、作業している間にさらに雪が積もってしまい、他の車まで動けなくなったため、ドライバーは車を捨てて避難することになりました。

その数およそ 100 台。

車内でCO中毒（1つの例として）

現場は十数台がとめられる駐車場。雪は太ももの高さ（50 cmほど）まで積もり、車は雪で隠れていました。

ドライバーは車を出そうと除雪を行っていましたが、エンジンをかけていました。

作業が終わり車に乗り込んだところ、すぐに意識がなくなり倒れました。

幸い、そばに人がいたのですぐに救助され助かりましたが、一酸化炭素中毒でした。

捨て場の宅地化

新潟市はここ数年で住宅が増え、かつて田畑だった場所にも家が建ち、郊外に広がっています。

今回の大雪で、住宅地に大きな問題が出ていたことが分かりました。雪捨て場の消失です。

以前は、道路や家の敷地に降った雪も近くの田畑に捨てることができましたが、宅地に変わったことで、かつての場所には捨てられず、結局、道路に山積みにならざるを得なくなっていました。

このため、さらに車が通れなくなり、普段の生活だけでなく、緊急自動車の通行にも問題が出ることも考えられました。

上記の事例について、

については、トラックが動けなくなっていたというアクシデントがあったにせよ、吹雪の中、だだっ広い雪原の中を突っ走る危険をどこまで持っていたか疑問を持ちます。雪がなければ、ところどころに逃げ道がある道路も、雪が降れば1本道です。

除雪が間に合わなければ轍ができてスムーズには走れず、雪が強く降れば前もよく見えません。

「途中で止まったらどうなるのか」。考えれば簡単なことですが、気持ちのどこかに「大丈夫だろう」という根拠のない自信があったのではないかと感じています。

また備えとして何台の車に「スコップ」が積まれていたか。雪道を走る際は必需品です。

「雪道を走る危険性」をそれほど感じていなかったといえるのではないのでしょうか。

しかし、こうした知識は「知らなければ知らないまま」で済み、時間が経ってしまいます。

少なくとも新潟市ではこれまで数十年は必要なかったわけです。

次に、 についてですが、

エンジンをかけて作業する場合「マフラー周りを先に」は基本です。

後回しにすると、排気ガスが車の底の部分にたまり、隙間から車内に入り込みます。

排気ガスが充満した車に乗り込めば...

実は、こうした事例は以前もありました。東京から来たスキーヤーです。

早朝にスキー場に来たため、オープンまで車の中でエンジンをかけて仮眠をとっていたところ、激しい降雪で車の周りが埋まり、排気ガスが外に逃げられず、車内に充満し一酸化炭素中毒になるケースです。

ただ、今回被害に遭ったのは地元の人でした。

こうしたことは、これまで生活する上で知っている必要がなかったために知らなくても困らなかったわけです。

都市化か核家族化か、昔あった知識や知恵が受け継がれていないのは、大雪災害についてもあるようです。

近年聞かれる高齢化による屋根の雪堀り要員不足の問題や、県外からの観光客への注意喚起も合わせて一度、雪の中で生活する際の危険をまとめ、広く伝える場を設ける必要があるように思います。

暖冬と騒がれ、大雪の機会が少なくなる今こそ、見つめなおさなければいけないテーマなのかもしれません。